

2025年9月1日

神戸学園都市 YMCA こども園 9月えんだより

9月の聖句「主は羊飼ひ。わたしには何も欠けることがない。」

詩編23編1節

沖縄尚学の優勝で幕を閉じた107回目の夏の高校野球の決勝戦から10日余り。子どもの頃の高校野球のテレビ中継で、決勝戦、そして、閉会式のころには甲子園球場のグラウンドを飛び交う赤とんぼが映し出された映像や、「甲子園の夏は終わりました。」といったアナウンサーの声。甲子園の夏の終わりが秋の訪れであったように思いますが、近年は、「甲子園の夏」が終わった後も日本中の夏が終わる気配は一向に感じられなくなりました。近年の気候変動の中で、過去の経験からは推し量れないようなことが多くなってきていますが、子どもたちがそれぞれの季節に合った楽しみや喜びを感じられるような歩みを守り続けたいと思います。

この夏は「戦後80年」ということもあって、「戦後」を振り返りつつ「平和」の尊さを考える機会が多くありました。そのような中、優勝した沖縄尚学の選手たちが「甲子園の土」を持ち帰り、地元の公園や公民館などにまくとっていたことが話題になったことを目にしたときに、「沖縄」と「甲子園の土」についてのある出来事を思い出しました。67年前の第40回記念大会に参加した沖縄県の首里高校の生徒は、袋に入れて持ち帰った「甲子園の土」を那覇港で検疫官によって海に捨てられたそうです。戦後13年、沖縄がまだアメリカの統治下にあり、「外国」だったためでした。その出来事を知った日本航空の職員が「土がダメなら検疫に触れない石を」と甲子園の外野で拾い集めた小石を首里高校に届けられ、今の記念碑に埋め込まれているそうです。その後、「戦後」が続く中で「甲子園の土」は沖縄の地へ持ち帰られるようになりました。

一方、ウクライナやパレスチナのガザ、また、アフリカなど海外の様々な国や地域の中で長引く戦争・紛争状態の中、激しさを増す戦闘によって多くの人々の命が奪われています。マスメディアを通して「停戦」に向けての交渉のニュースが流れてきますがなかなか実行されません。それぞれの最高権力者が今置かれている自身の地位や国・地域の状況に満足することなく、更に、満足を得られるものとならないのは（紛争や戦争の）相手に原因があると考えているからのように思えます。自国に、自分に「無いもの」を探し求めることで「あるもの」までも見失っているのではないのでしょうか。以前紹介した南米ウルグアイのムカヒ元大統領は「わたしは、自分を貧しいとは思っていない。今あるもので満足しているだけだ。」と。

私たちは何か大きな壁にぶつかった時に「〇〇がこうだったら...」「あの時こうすれば...」と考えてしまいます。けれどもこの「たら」や「れば」は決して実現しません。それは、私たちがこの世に生を受けた瞬間に、神様が自分に必要なものすべてを授けてくださったからのように思います。

これから訪れる実りの季節、神様から子どもたちひとりひとりに授けられた恵みに感謝し、それぞれの恵みが豊かに実ることを祈りつつ歩みたいと思います。

9月	乳児 (0,1,2歳児)	幼児 (3,4,5歳児)
月主題	みてみて／おもしろそう	おもしろそう／気持ちいい
月の願い	<ul style="list-style-type: none"> ・保育者の祈りや讃美歌を真似ようとする。 ・保育者との関係が深まり、安心して自分を表す。 ・空や雲、虫の音を保育者と共に感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏の間、それぞれの場で守られたことを感謝し、礼拝、祈り、賛美の時を共にする。 ・友だちと仲間（群れ）になって過ごすことや、イメージやルールを作り出し一緒に遊ぶことを嬉しいと思う。 ・空や太陽、風など季節の変化に気づき、戸外で体を動かすことを心地良く感じる。
讃美歌	「ちから」 幼児讃美歌Ⅱ15	